

今川氏真と和歌

——天正三年『今川氏真詠草』をめぐつて——

小 山 順 子

はじめに

永禄十一年（一五六八）十二月に武田氏が駿河へ侵攻し、今川氏真は駿府の今川館を出て遠江の懸川城へ敗走した。さらに翌年、徳川氏の総攻撃を受け懸川城に籠城、五月に開城して、氏真は北条氏の庇護下に入る。これにより戦国大名としての今川氏は滅亡し、氏真は徳川氏の庇護のもとに生涯を終えることとなる。

戦国大名・今川氏を滅亡させた当主として、氏真は暗愚の将と評される。

氏真公あしき大将にてもあれ、（中略）氏真公、其御年廿三までも、月見花見遊山の善悪はしり給ふといへども、武道のたゞぢ聊もおはしませず、無下に人を見しり給はねば、家康公此屋形に御心を離さるゝ事尤道理にあたれ

り。『甲陽軍鑑』巻二)

『甲陽軍鑑』では他の箇所でも、「無分別微弱にておはしませど」(巻七)と氏真を評する。享楽に身を費やし、武道を修めず人を見る目が無かったために家康にも見放されたというのである。こうした氏真評に大きく関わるのが、和歌・連歌の文芸、蹴鞠等の芸能を好んだという点であった。⁽¹⁾

但し、文芸や芸能に関心を持ち文化活動を営むことは、戦国大名にとってはむしろ積極的に評価されるものだった。特に駿河は、初代の今川範国が貞治六年(一三六七)『新玉津島社歌合』に出詠しており、その子・了俊は冷泉家流の歌人として様々な歌学書を著している。さらには応仁の乱後に京から公家や連歌師が駿河に下向したことにより、文化サロンが形成され文芸活動はいっそう盛んになり隆盛を誇った。それが一転して、氏真の和歌への熱意が「日本治りたりとても、油断するは東山義政の茶湯、大内義隆の学問、今川氏真の歌道ぞ」(松平定信『閑なるあまり』)と記されるように、国を滅ぼした放蕩と捉えられてきたのは、氏真の代で駿河今川氏が滅亡したという結果から導かれたものである。無論、批判に文芸への行き過ぎた熱意を戒める意は汲みうるが、氏真が暗愚な武将であったという評価を見直す研究も進んでいる。⁽²⁾

小稿では、今川氏真の天正三年『今川氏真詠草』から、本詠草の性質と氏真が和歌に寄せた関心を検討したい。

一、氏真の和歌

まず、氏真と和歌との関わりおよび資料についてまとめておく。

今川氏が和歌を学ぶ上で重要な役割を果たしたのは、冷泉家の歌人であった。氏真については、冷泉為和が最初の⁽³⁾

師であったと推測される。為和の父・為広も駿河に滞在したことがあり、そうした縁から為和も駿河を訪れた。二十代の頃に初めて駿河に来たものと思われるが、四十代半ばで駿河に来た折に、義元の兄・氏輝の和歌師範となった。五十代半ばからは駿河と甲府の間を往復するようになり、一五四九年、京都に戻ることなく六十四歳で駿河で没した。生涯の半分は、京都を離れて東国で送った人物だった。

冷泉為和の指導のもとに、今川家では頻繁に歌会や歌合が催された。冷泉家時雨亭叢書50『為広・為和歌合集』（朝日新聞社、二〇〇六年）には、今川家で催された歌合を為和が書き記したものが含まれており、氏真主催「今川龍丸張行歌合」で詠んだ氏真歌も収められている（龍丸は氏真の幼名）。この歌合にも為和が判を付けているが、為和は一五四九年に没している。没年に催されたものとしても、氏真は当時十二歳、いまだ幼名を名乗る元服前に詠んだ歌である。氏真も幼少期は為和から和歌を教えられ、為和没後は、為和の息子の為益から教えを受けた。永禄九年（二五六六）九月に、当時二十九歳の氏真が、為益に対して古今伝授を乞うた誓状も残されている⁽⁴⁾。

なお氏真の父・義元は、今川家の当主として様々な歌合や歌会を開き、和歌を詠んでいたが、漢詩や和漢聯句を好んでいたらしい。義元は駿河の善得院や京都の建仁寺・妙心寺で修行した。また義元の教育係であった太原崇孚（雪齋）も、もともとは建仁寺の僧侶で、後に妙心寺第三十五世となっている。京で義元と太原崇孚は公家の和漢聯句会に参加しているし、駿河版『聚分韻略』『歴代序略』の刊行に太原崇孚が関わっているなど、義元が学んだ環境は漢籍や漢詩など漢文が中心だった⁽⁵⁾。

一方、氏真の幼少期について詳しいことは判明していないが、おそらくは駿河の今川家で育ったものと推測される。氏真の幼少期から青年期、経済的に豊かな大国・駿河には、当主である義元を頼って、様々な人々が駿河を訪れ滞在していた。先述した冷泉為和以外にも、義元の母・寿桂尼の実家である中御門家、父・氏親に和歌を教えた三条西家、

その他にも山科家・正親町三条家・四辻家の人々も来訪している⁽⁶⁾。また、連歌師もやって来る。こうした京都から来た公家や連歌師たちは、土産として歌集や物語を携えてきた⁽⁷⁾。また公家や連歌師が来ると、彼らを囲んで歌会や連歌会が開かれた。文化的な環境としては、漢学よりも和歌や物語などの和学が盛んで、それらが氏真の教養の中心だったと推測できる。

今川氏および氏真の和歌事績については、すでに井上宗雄⁽⁸⁾・米原正義⁽⁹⁾による研究がある。氏真の和歌は、『天正三乙寅年詠草』（国立公文書館内閣文庫、201/600、以下「今川氏真詠草」と略称する）と『詠草中』（井上宗雄旧蔵、現蔵は不明）の二種の詠草と、四種の百首和歌、一種の十五首和歌および拾遺五十二首が『今川氏と観泉寺』（吉川弘文館、一九七四年）に収められている。その後、井上宗雄・望月俊江「草庵中（今川氏真詠草）——翻刻と解題——」（『中世和歌資料と論考』明治書院、一九九二年）が報告された。井上宗雄旧蔵であった「草庵中」は、現在、早稲田大学図書館の蔵書（整理番号へ4/8163）となっている。『新編私家集大成』には『今川氏真詠草』（氏真Ⅰ）・『詠草中』（氏真Ⅱ）・『草庵中』（氏真Ⅲ）が収められている。

さらに近年、先掲の冷泉家時雨亭叢書50『為広・為和歌合集』所収「今川龍王丸張行歌合」や、島田市博物館特別展「女戦国大名寿桂尼と今川氏」（二〇一七年九月一六日〜十一月二六日）で公開された新出の和歌懐紙など、氏真の詠作が発見されている。未だ報告されていない詠草も残されているだろう。

氏真の詠作については、「古典への深い教養が現れている」（『和歌文学大辞典』「氏真」竹島一希執筆）「平明な内容で、伝統的な詠みぶり」（同書「氏真百首」竹島一希執筆）とあるのが代表的な評価である。加えて小川剛生は、幼少期から水準以上の歌才を持っていたこと⁽¹¹⁾、さらには氏真が和歌に謡曲を踏まえたり、複雑な題を詠みこなす手腕がある一方で、直截に自分の境涯を吐露する歌を残していること⁽¹²⁾も指摘している。

氏真のまとまった和歌では、天正三年（一五七五）の一年間に詠んだ歌全四二六首を収めた『今川氏真詠草』が、残されている中で最も古いものである。『今川氏真詠草』は、天正三年の氏真の事績を辿る史料として活用されているが、和歌表現やその内容についてはほとんど検討されてこなかった。前掲の『今川氏と観泉寺』第二部第三章第三節「氏真の生涯（二）——中期——」（井上宗雄執筆）に、氏真の足取りを追いつつ和歌表現にも注目した言及がなされていた他には、近年、嵯峨良蒼樹『評伝今川氏真——みな月のみしかき影をうらむなよ』（SAGARASUN 出版、二〇一八年）が氏真の旅の様子や和歌について検討を加えているのが、『今川氏真詠草』の和歌に関する先行研究である。

『今川氏真詠草』の和歌の特徴や、そこに見いだせる氏真の物の見方や関心の有りようについては、考究の余地が多分に残されている。中世和歌を研究する立場と視点から、『今川氏真詠草』に詠まれた氏真の和歌に寄せる関心やこの詠草の性質について、以下考察してゆく。

二、『今川氏真詠草』に見る氏真の関心

天正三年当時、氏真は三十八歳だった。『今川氏真詠草』は端題に「天正三乙寅年草案 宗閻」と記されている。端書は別筆で書かれている上に、天正三年は正しくは乙亥であり、干支が誤っているため氏真自身の命名ではないと推測されている⁽¹³⁾。但し、氏真が「宗閻」と署名したことが確認できる最も古い史料は天正三年七月十九日の上杉輝虎宛の書状であるから⁽¹⁴⁾、詠草をまとめた時点で「宗閻」を名乗っていたのは確かである。今川氏は、永禄十一年（一五六八）に武田信玄の侵攻を受けて駿河から出て、翌十二年（一五六九）に懸川城も家康に明け渡し、駿河での覇権を失った後だった。浜松で家康の庇護のもとにあった氏真は、京都へ旅に出る。

旅の目的は、「(正月) 十三日物詣の志ありて発足」(9番詞書)とあるように、物見遊山だった。そしてこの詠草は、「是より道すがらの所く行く書きしるすも同計なれば、つゞかずとも歌にして、田舎のなぐさみにもと書付」(26) 30詞書)と記しているように、ただ訪れた場所を記録するだけではなく、和歌を詠み、「田舎のなぐさみ」にしたいというものだった。ちなみに「思ひしは数にもあらず九重や八重ににぎほふ軒をならべて」(37)と詠んでおり、想像で思い描いていたよりも賑わっている京の様子に感動を覚えているので、この時が氏真にとって初めての上洛であったことが分かる。

さて京都を訪れた氏真は、精力的に京都の名所を訪れた。四月二十三日に京を出立するまでに氏真が訪れたまたは眺望した(しようとした)場所を、詞書から掲出したが次の一覧である。和歌に詠み込まれた地名も含めるとさらに数は増えるが、ひとまず詞書から掲出する。なお、複数の歌に詞書が掛かっている箇所が多く煩雑になるため、その場合は最初の歌の番号だけを挙げた。

白川・神楽岡吉田・東山殿御旧跡(37) 四条・恋の中川(38) 祇園(39) 八坂の塔・雲居寺・真葛原(40) 清水寺(41) 知恩院・靈山八寺(43) 三十三間堂蓮花王院(44)・東福寺・南明院 俊成御廟(45)・仏光寺・六条河原院跡(46) 禁中(47) 北野社(49) 内野(51) 北山石不動(52) 金閣(53) 舟岡七社・双の岡・紫野(54) 引接寺(59) 松尾・西方寺・梅津寺・大井・桂・西院・壬生(60) 賀茂社・宮中・千本・比叡山(67) 愛宕・嵯峨・広沢・紙屋川・鳴滝(70) 清滝川・高尾・梶尾(75) 陽明院・千本(83) 北野社(84) 亀山(88) 有栖川・大井川・恋の中川・西行庵室跡・嵐山(89) 松尾山・大井川(94) 称念寺・大覚寺・名こそこの滝(96) 栖霞寺(98) 法然石塔・二尊院(100) 大覚寺(101) 竜安寺・衣笠山(102) 等持院(105) 鞍馬・市原(106) 僧上ヶ谷・貴船(111)

市原・小野 (113) 深泥池・松ヶ崎 (115) 八幡社・東寺・鳥羽 (120) 石清水 (132) 宇治・田原・大和路 (136) 山城・伊賀 (143) 歎喜寺 定家御廟 (150) ・泉涌寺・雲龍院 (151) 来迎院 (153) 深草・稲荷・東福寺 (155) 二尊院 (159) 定家山莊跡 (161) 戸無瀬の滝・野々宮・芹川 (162) 竜安寺・等持院 (164) 嵯峨 (167・178) 天龍寺・涙川 (183) 三鈷寺 (186) 仁和寺 (188) 妙心寺 (193) 清水 (195) 東龜山・靈山 (198) 藪林寺 (200) 祇園・知恩院・黒谷 (201) 東山殿跡 (204) 吉田宮 (204) 伏見・醍醐 (206) 西行住居跡・神楽岡 (207) 鴨川 (212) 清水 (213) 雲林院 (220) 音羽山・靈山 (230) 東山 (233) 建仁寺光堂 (239) ・清水 (248) 三条西実澄邸・飛鳥井邸 (253) 八幡 (257) 宇治 (261) 平等院 (266) 朝日山 (268) 指月庵 (269) 花山 (271) 阿弥陀峰 (272) 神輿岡 (284) 糺の森 (285) 竜安寺 (286)

一月下旬に京都に入ったと思われるが、四月二十三日に京を発つまでの三ヶ月間で、西は嵯峨嵐山・愛宕、北は鞍馬・貴船・市原、南は宇治田原や八幡までと、京都中を巡っていたことが分かる。なお京へ入りまず東山近辺の名所を巡っていることから、氏真が京都の拠点としたのはおそらく東山のどこかだったと思われる¹⁵。京都に初めてやって来て、有名な場所を次々に訪れ和歌を詠む精力的な姿は、それ以前に京都に対して抱いていた関心の高さ、さらに言えば、氏真の憧れの強さを窺わせる。

注目されるのが、四角で囲ったように俊成御廟 (45) ・定家御廟 (150) ・定家山莊跡 (161) を訪れていることである。俊成・定家は、氏真が和歌を学んだ冷泉為和・為益の祖先にあたる。特に定家は、歌人にとって崇敬の対象であるから、俊成や定家の廟は、歌人として、また冷泉家流の和歌を学んだ身として、ぜひ訪ねておきたい場所であったのだろう。

また、寺社仏閣と並んで歌枕にも多く訪れている。例として二首挙げる。

仏光寺こゝかしこ見物、六条河原院の跡畠也

煙こそたゆと聞つる塩竈のうら若草にいづち共なし (46)

暮過る程に京へは遠し。称念寺一宿

昔だに絶ぬる瀧の音なれどしたへば名こそ猶残けれ (96)

大学寺の瀧、名こそその瀧と云

46は源融が河原院に塩竈の浦を模して作った景勝を偲び、「持ち主であった源融が亡くなった後、すでに煙が絶えてしまったと聞いていた塩竈の浦には、うら若い草が茂って、どこに塩竈の浦が築かれていたのかも分からない」、96は名こそその瀧を見ながら詠み「公任が歌を詠んだ昔でさえも絶えてしまっていた瀧の音ではあるが、それを慕っているから名こそその瀧の高名は今なお残っているのだ」の歌意である。46歌は『古今集』の「君まさで煙たえにししほがまの浦さびしくも見え渡るかな」(哀傷⁸⁵²「河原の左のおほいまうちぎみの身まかりてのち、かの家にまかりてありけるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるを見てよめる」)を、96歌は「たきのおとはたえて久しくなりぬれど名こそながれてなほきこえけれ」(『百人一首』55公任／『拾遺集』雑上⁴⁴⁹「大覚寺に人人あまたまかりたりけるに、ふるきたきをよみ侍りける」初句「たきの糸はこ」を踏まえて詠んでいる。和歌に詠まれた旧跡を訪れ、古歌の時点ですでに失われていた煙・瀧音がやはり無いことを確かめるといふ視点である。

こうした古歌を偲び、旧跡を訪れてその場所の現状を確認するという氏真の姿勢が顕著なのが、92歌である。なお、さきほど一覽表には89詞書としてあげたが、89～93までの七首には同じ詞書が掛かっている。

ありす川、大井川、恋の中川、西行庵室の跡など、申せども、畠の如く也。上は嵐山

哀いかにあたら桜の陰もなしかこちがほなる隠家の跡（92）

歌意は、「あなんと惜しいことに桜の木陰も無いことだ。恨み嘆いている様子の隠れ家の跡だ」。詞書から、氏真が行ったのは嵯峨嵐山近辺なので、今の西光院（京都市右京区嵐山山田町）近辺だと推測される。西光寺は明治時代になって、西行の庵の跡地に寺が作られ、それ以前は荒れ果てていた場所なので、氏真が「畑のごとくなり」と記しているのに合致している。氏真は、西行が住んでいた場所を訪れたが、そこはもうすっかり様子が変わってしまった。いた。

歴史ある場所を訪れても、何百年という時代を隔てているため、当然、景色は変わっている。それでも時代を超えて同じものがあるはずだ、何か欠片でも過去を偲ぶすがが残されているだろう。歴史上・物語上の人物の視線で景色を見る「追体験の旅」⁽¹⁶⁾には、そうした期待がある。氏真も、西行が住んでいた場所で、西行が見た景色を見たかったのだが、そこには桜の木陰が無いと詠んでいる。92歌は桜の咲き始めの季節の歌なので、畑のように荒れたその場所には、桜の花が咲いていないというだけではなく、桜の木すらもはや無かったのだろう。西行は「ねがはくは花のしたにて春しなむその二月のもち月の比」〔『新古今集』雑下¹⁹⁹³「題しらず」〕と詠み、その歌の通りに二月十六日に没したことで有名なように、桜花と月をこよなく愛した歌人だった。その西行が住んだ場所で、氏真は西行を偲びながら、西行が愛した桜の花を見たかった。換言すると氏真は、西行の視点で、西行のように、西行が住んだ場所で桜を見て、和歌を詠みたかったのである。

またこの92歌で注目されるのは、氏真の和歌が三句まで西行歌の詞をそのまま使っている点である。「哀いかに」は

「あはれいかに草葉の露のこぼらむ秋風たちぬ宮城野の原」(『新古今集』秋上 300 「題しらず」)、「あたら桜の」は「花見にと群れつつ人の来るのみぞあたら桜のとがには有りける」(『山家集』 87 「しづかならんと思ひけるころ、花見に人々まうで来たりければ」)、「かこち顔なる」は、「嘆けとて月やは物を思はするかこちがほなる我が涙かな」(『千載集』恋五・929 「月前恋といへる心をよめる」)／『百人一首』 86) から、それぞれ取った詞である。西行の著名歌の一部ずつを切り抜いて、継ぎ合わせて作ったような歌だ。これを模倣や真似と評するのは簡単だが、先述したように氏真は、西行ゆかりの場所で、西行の見たものを見て、西行のように和歌を詠みたかったのである。西行が見た景色は見られなかったが、西行ゆかりの場所で西行のように和歌を詠みたいという願望が、西行の使った詞を使って自分が歌を詠むという行為につながっている。氏真自身の落胆や嘆きを、西行の詞で表現する、これは西行の追体験と呼ぶうる営為である。

ちなみに氏真の和歌への態度を示すエピソードとしてこれまでも引用されてきた¹⁷ものであるが、『故老諸談』に次のような逸話が残されている。

今川氏真入道宗閻御対談の時、和歌物語を披^レ成ければ、宗閻云、「歌道は廣大にして常人の至る所に非ず、一句をつらぬるにも、詞を習はずしては云出す事ならず、師伝なければ読方をしらず、詞花言葉の為に、遍く歌書を見ざれば歌らしき歌なく、殊にむつかしき物にて候」と申されければ、……

和歌の道は果てしなく、凡人がたどり着けるものではない。一句を連ねるにも、和歌の詞を学ばずに作り出すことはできない。師匠からの教えがなければ詠む方法はわからない、和歌の詞のために、広く歌集を読まなくては歌らし

い歌はできず、特別に難しいものです、と氏真が家康に話したという。この後には、家康が氏真に、そうした歌の作り方は「青公家衆」のものだ、和歌は思うがままに詠めばよいと言い、氏真は返す言葉がなかったと記されている。氏真の和歌への耽溺や、兵法よりも文化に傾く姿勢を批判する文脈であり、またこれが実話かどうかも分からないのだが、氏真の和歌の作り方には合致した記述である。和歌の詞を学ぶこと、師匠から教えを受け広く歌集を読むことが必要だというのは、中世の歌人にとっては常識的なものではある。伝統的な詞や表現の中で詠歌するということが、氏真についていえば、古歌の詞を使って和歌を詠むことは、昔の歌人たちの視線と重ね合わせて情景や感情を表現する、古の歌人の感受性をなぞる行為でもあったと考えられる。

三、『今川氏真詠草』と戦乱の時世

『今川氏真詠草』はあくまでも和歌を主体とした歌日記である。氏真が、和歌の中心であり本拠地の京都で、自らも歌人としてその地に立ち歌ごころを表現するというものだ。

その姿勢は、京を離れた後も一貫している。『今川氏真詠草』が氏真の伝記研究で重要な史料となってきたのは、詞書から氏真の足跡を辿れるからである。しかし、和歌そのものには戦国の時世を窺わせるものはほとんど詠まれていない。

例として、長篠の戦いの前後に詠んだ歌を取り上げる。「三州境さはがしきと云人あるを聞て、いそぎ下るべきとて」(288・289 詞書)と記されるように、武田勝頼が三河へ侵入したのを機として、氏真は四月二十三日に京を出立する。四月二十九日に尾張名古屋に到着するが、「さい山麓(ヤマ)に舟を着る、所々名所あり。忘(わす)ざるさきにと、とまりにて書つくる」(311～319 詞書)とあるのに端的に示されているように、その間の旅で近江から尾張の歌枕を実見し和歌を詠み続けている

る。京を離れても、和歌の伝統に即した叙景に眼目がある。

さて、戦に際して最も緊迫した折の和歌を見てみよう。

夜半より雨晴て早朝立、三屋のわたりをして尾張奈古屋に着、
卯月廿九日 弥境目物さわがしければあたりも見ず下向、

軒近き竹の若葉も茂り合て又めづらしき庭の面かな (321)

あやめ草かりねとぞおもふ五月雨のふるき軒もるよはの枕に (322)

都にて聞し初音は春なれど五月も稀に鳴時鳥 (323)

竹垣の外面の日影暮初て匂ふもさびし樗さくかげ (324)

春の夜は思ひやりつる庭の面の若葉に霞む月の涼しさ (325)

早朝に出立して名古屋に到着するまでは、「弥境目物さわがしければ、あたりも見ず下向」とあるように、さすがに歌枕や名所に目を配る余裕は無かったらしい。しかし井上宗雄¹⁸はこの折の和歌について、「和歌自身はもとより世上の緊迫感を詠んだものではなく、季節の景・情を詠んだものであるが、かなり佳什が揃っている。(324・325引用略、引用者注) 世俗的な緊張感の高まりが、却って調べを張りつめさせているのかもしれない」と評価している。慌ただしく緊迫した状況の中、歌枕を実見し和歌に詠むことはできなかつたとはいえ、それでも戦に向かう心情も騒がしい世上も和歌には全く投影されていない点に注目される。

この後氏真は、長篠の戦の後詰をつとめ、諏訪原城の侵攻に加わっている。

五月十五日三州牛久保打着、長篠後詰のほど毎日備ありて、同廿一日甲州勢敗軍、廿五日迄山中さがし出すとて張陣、廿七日駿河筋動所へ放火其ひまゝに

目路絶て雲のをりゐる賤機（326）の山も緑の五月雨の頃

月日へてみし跡もなき故郷にその神垣ぞかた計なる（327）

清見がたはるゝ向ひの水底に影をならぶる三保の松原（328）

玉鉾の跡ともみえず茂りつゝこゆるも迷ふうつの山哉（329）

雲霧の晴行富士の白雪は時しらねども時わかれけり（330）

氏真は五月十五日に三河国牛窪に到着し、後詰めに備えた。十八日に信長軍と家康軍が設楽原に到着し、二十日深夜に鳶ヶ巣山砦を強襲、二十一日早朝から昼過ぎまで武田軍と織田・徳川軍の戦いが続き、武田軍は敗れ合戦は終結した。戦の後、二十五日まで氏真は武田軍の残党を山中で探索するために陣を張り、二十七日には家康の遠江・駿河の武田領への侵攻に随っている。

この折の和歌について、米原正義（19）は328歌について「あるいは三保の松原に駿河今川氏そのものを感じていたかも知れない」、小和田哲男（20）は326〜330の五首について「氏真の故郷に寄せる感慨が、何となく伝わってくるような歌である」と指摘している。但し直截的に心情が詠まれているのは、327歌「月日へてみし跡もなき故郷に」だけであり、ここに自身がかつて治め、失った駿河への悲哀を詠んでいる。五月十九日は父・義元の命日であるから、悲哀はいっそう大きかったと想像される。しかし、他は「清見瀉」「三保の松原」「宇津の山」「富士」と、駿河国の歌枕を和歌に詠むことに主眼が置かれている。特に329・330は『伊勢物語』第九段「宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う

細きに、蔦かへでは茂り、もの心細く……／駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」を踏まえ、業平の東下りの視点に自らを重ねて和歌を詠んでいる。長篠の戦いの渦中であって氏真が詠んだ歌は、五月の風物を描き出すばかりで、戦乱の時世を映さないことに改めて注目されるのである。

こうした点からも、『今川氏真詠草』の和歌が、〈古いにしへ〉の風雅を偲ぶという基調で貫かれていることが看取されるのである。確かに詞書には自身がどこで何をしたかという記録の性格もある。しかし和歌には、戦乱の時世を映すことに氏真の意図は無いのだ。

そうした中で注目されるのが、次の一首である。

信長和泉筋出陣、八幡にて見物

みかりせし跡や鳥羽田の面影に賤が車ぞ行廻りける (257)

この歌は、信長の出陣を八幡まで見に行った折のものである。単に「見物」と記されているが、『宣教卿記』によると、五日に出陣前の信長を見舞ったメンバーで、六日も円福寺門外で見物したとある。『宣教卿記』の記述は、以下の通りである。

『宣教卿記』天正三年四月条

□日、卯、天晴、一、信長へ各見舞ニ参也。人数之輩次第不同、三大・中山大・鳥大・山大・勸大・源中納言・

四中・甘中・源宰相・勸弁 [] 広橋・竹兵・中院・松木・持明院・河鱒 [] 左衛門督・五辻・薄・中山中
将・新蔵人 [] 坊城・予。

一 [] [] 振舞也、三侍従ニハコシ刀被_レ致也。

六日、戌、天晴、一、信長大坂へ陣立也。各被_レ来_二見物_一云々。昨日之人数早々見物也。園福寺^(巴)門外見物也。藤
吉・大塩・因幡伊予、信長手人数一万計トノツモリ也。(下略)

ここには氏真の名は見えず、五日の信長への見舞いには同席していなかったらしい。しかし六日の見物は、氏真が
自発的に出向いたというより、信長や公家との付き合いの一環として加わった可能性が高いと考えられる。

「みかりせし…」の歌意は、「歴代の天皇や上皇が狩りをした鳥羽田の面影に、賤しい者たちの車があちらこちらを
行き巡る」。信長の一方にも及ぶ軍勢が進む様は、「辰刻信長南方へ出陣、一万余、室町通五条へ也。(中略) 今日出陣
驚_レ目之由申了」(『兼見卿記』天正三年四月六日条) とあるように、見る者を驚かせるものだった。氏真はこの大軍勢
を「賤が車」すなわち賤しい者たちの車と見なし、それが歴史ある場所を蹂躪するのを嘆く歌を詠んだのだ。

鳥羽は山城国の歌枕で、現在の京都市南区上鳥羽から伏見区下鳥羽にかけての1帯を指す。鳥羽田は鳥羽にある田
を意味し、京から八幡へ向かう途上に鳥羽田はある。

なお氏真はこれ以前に、鳥羽田を通過して八幡参詣へと訪れていた。

八幡参詣、道すがらとへば名に聞し所なれども、よりて見ねばそれともなし。霞さへ立わたりて中く名計
書付て覚るほど也。宿にてはしぐよみつぐ。東寺を鳥羽へ出

ふりにける法のしるしの朽やらで其暁をいつと待らん (120)
 心あての霞計ぞ深草やをとほ稲荷の山端もなし (121)
 春霞たてるあなたや山科の岩ねの松が風聞ゆ也 (122)
 民の屋も緑につづく川ぞひの茂るや竹田伏見成らん (123)
 なく雁の過る鳥羽田の面影も霞こす日のうつる山端 (124)
 まこも草下もえすらし行水のみまきの里ぞ青みわたれる (125)
 峯の寺里も河とも絶くにあらぬけしきの立かすみ哉 (126)
 みな際の煙もなびく青柳に家の霞める遠の山ぎは (127)
 立つて綱手くるてふ網もなし霞を引か淀の川をさ (128)
 又もこば月の桂の河せ舟霞隔てゝあかぬ名残を (129)

二月に稲荷から伏見、竹田を経て鳥羽を通り、八幡へと向かった折に詠んだ 120～129 の十首である。この中の 124 歌に「鳥羽田の面影」という同じ詞が使われている。124 歌は「おほえ山かたぶく月の影さえてとばたの面におつるかりがね」(『新古今集』秋下 503 慈円「五十首歌たてまつりし時、月前聞雁といふことを」)を踏まえ、秋の雁が鳴く鳥羽田を想像したものと考えられる。「鳥羽田の面影」とは、氏真にとって和歌的・王朝的伝統を追慕して浮かぶものだった。

但し鳥羽田と八幡とは距離も離れており(約 15 km 離れている)、八幡での見物に鳥羽田を詠むのはやや不審である。おそらく氏真は、二月に京から八幡へ向かう途上で、鳥羽田だけではなく深草・山科・美豆御牧など点在する様々な歌枕に和歌の伝統を実感したことを、四月の八幡への旅で振り返っていたのではないか。信長の軍勢も、京から八幡

へ向かう際に同じ道程を辿ったと推測される。単に八幡や鳥羽田だけのことではなく、その途上にある歌枕を信長の軍勢が進む様子を「賤が車ぞ行き廻りける」と見たのだ。また初句に「みかりせし」とあるが、鳥羽田が狩獵地であった歴史は確認できない。これは、信長の軍勢を「賤が車」と見るのと対比して、戦と同様に殺生の行為ではあっても、古の天皇たちが狩りをする雅な様子を描出したかったものと考えられる。

歌枕とそこを進む信長の軍勢との対比は、風雅と武力、古と今との対立とも言える。氏真が風雅・古の側に立つ視点で和歌を詠んでいるのは明らかだ。和歌を愛し、歴史に敬意を払って京都の様々な場所を訪れた氏真にとって、歌枕の歴史や風情に目もくれず進軍する信長の軍勢は「賤が車」と映ったことを示している。

257 歌については、井上宗雄は「歴史的・古典的な由緒ある地を、信長の軍旅が踏みにじって行く、といった傍観者の、皮肉な眼で眺めている」と指摘している²¹。加えて、この信長の出陣に対する257 歌は、出陣の景色を詠んだものとして、『今川氏真詠草』の中にあつて異質で目を引く。では、戦国の時世を和歌に映そうとしなかった氏真が、ここでは進軍の景を題材として取り上げて詠んだのはなぜだったのだろうか。

四、信長との面会と蹴鞠

「賤が車ぞ行き廻りける」に見る信長への批判的な眼差の背景には、この直前に行われた信長との面会および蹴鞠の披露があると推測される。

『信長公記』天正三年条

三月三日、永原に御泊り。次の日、御出京、相国寺に御寄宿。三月十六日、今川氏真御出仕、百端帆を御進上す。

以前も千鳥の香炉・宗祇香炉を御進献のところ、宗祇香炉は御返しなされ、千鳥の香炉は止め置かせられ候べき。
今川殿鞠を遊ばさるるの由、聞こしめし及ばれ、

三月二十日、相国寺において御所望。御人数、三条殿父子、藤宰相殿父子、飛鳥井殿父子、弘橋殿、五辻殿、鷹司殿、烏丸殿。信長は御見物。

二月二十七日に上洛した織田信長は、相国寺に滞留していた。三月十六日、氏真は信長に面会に行く。そこで信長に、茶道具の名物・百端帆を進上した。これ以前にも千鳥の香炉と宗祇香炉⁽²²⁾を進献していたが、信長は宗祇香炉は返したという。そして傍線部にあるように、信長は氏真が蹴鞠をすることを聞いて、三月二十日に相国寺で蹴鞠を見たと言った。

信長は、桶狭間の戦いで義元を殺した、父の仇に他ならない。小和田哲男が「父義元を殺したその信長の眼前で、流浪の身をさらしながら蹴鞠を演じなければならなかった氏真の胸中はいかばかりであったろう。あるいはすでに、恩讐を超えた境地にいたのだろうか⁽²³⁾」と述べるように、氏真の心中には様々な想像を誘われるが、三月十六日の面会および二十日の蹴鞠について『今川氏真詠草』では何も触れられていない。

なお谷口克広⁽²⁴⁾は、中御門宣教『宣教卿記』および『中山家記』天正三年四月条を挙げ、氏真が信長の前で蹴鞠を披露したことが確認できるのは、四月三・四日のことだと指摘している。

中御門宣教『宣教卿記』天正三年四月条

三日、丑、天晴、(中略)信長今夕鞠、各申合仕ノ由在^レ之、飛父子ニ被^レ申付^レ也。人数之輩次第不同、八人ツメ

也。初者年ヨリ衆、三大・飛大・勸大・藤宰・左衛門督・源宰相・ハキツメ五辻・薄・広橋・日野、若キ衆者立カハリく也。中山中將・烏丸弁・飛中將・三大侍従・中院・藤侍従・駿河ノ今川等也。其外見物衆、中山大・山大・源中納言・四中・持明・葉室・勸弁・竹兵・予・新藏人也。信長者見物也。(下略)

四日、寅、天晴、一、信長又二鞠在_レ之云々。信長ケラル、ト也。人数前衆也。

『中山家記』 天正三年四月条

三日、「辛未」、天晴、(中略) 今夕於_二信長宅_一有鞠、各相伴令_二見物_一。鞠人数、三条大納言・新大納言・勸修寺大納言・藤宰相・左衛門督・親綱・為仲・通勝等朝臣、光宣・輝資・兼勝・公宣・橘以緒・今川入道等也。信長令_二見物_一了。

四日、「壬申」、天晴、晩頭依_二信長宅_一有_二蹴鞠_一、見物如_二昨日_一。

四月三日、信長が夕方から蹴鞠を見たいから、それぞれ申し合わせておくようにと、「飛父子」すなわち飛鳥井雅教・雅敦に申し付けたとある。以下、蹴鞠のメンバーが記されており、その中に「駿河ノ今川」すなわち氏真の名が見える。『信長公記』に書かれているメンバーも、「鷹司殿」以外はここに含まれている。そして翌四日は、三日と同じメンバーで再び蹴鞠が催され、信長自身も蹴鞠に加わったという。

『信長公記』三月二十日の記事では、メンバーに氏真の名は書かれていない。前の文章からの続きで、わざわざ氏真の名を記さなかったとも考えられる。また『信長公記』の作者は、信長の近くで仕え書記役をつとめた太田牛一だから、信憑性のある記事ではあるので、三月二十日も蹴鞠の披露があった可能性はある。⁽²⁵⁾

この信長との面会・蹴鞠について、『今川氏真詠草』にそれと示す記述は見いだせない。²⁶但し、三月二十日に蹴鞠が有ったかどうかは措くとして、三月十六日に氏真が信長に面会したとすれば、注目されるのが次の詞書と和歌である。

健仁つとむ光堂の藤見物、時うつる

古寺は雲の見越に顕れて光合たる藤の下かげ (239)

立よりて思へば藤の花盛波にたゞよふ庭の面かな (240)

建仁寺は父の義元が、太原崇孚とともに享禄三年（一五三〇）から天文二年（一五三三）まで三年間修行をしていた寺だった。なお妙心寺も義元と太原崇孚が修行し、太原崇孚が第三五世となった寺である。妙心寺についても、193 詞書に「妙心寺一見（以下、略）」とあり、花盛りの頃（二月中旬か）に訪れていたことが知られるが、建仁寺は 239 詞書以前には登場しない。

ちなみにこの次の 241 詞書には「三月廿三日時鳥初て鳴」とあり、三月二十三日の直前に建仁寺を訪れていることが分かる。となると、相国寺での信長との面会の直後に建仁寺を訪れていることになる。詞書は「建仁寺光堂の藤見物、時うつる」とあり、和歌にも古い寺で見る藤花の美しさしか詠まれていない。しかし、それまで訪れていなかった建仁寺に、信長との面会直後に行っているのは、父を偲ぶ行動であった可能性が想定されるのである。

また、三月二十日の蹴鞠に氏真が参加したかどうか、または蹴鞠の会が二十日にあったかどうかは不分明であるが、氏真が蹴鞠を四月三日と四日に信長の前で披露し、四日には信長自身も蹴鞠に参加したのは、『宣教卿記』『中山家記』の記事から確実である。それを踏まえて『今川氏真詠草』を見ると、次の箇所注目される。

今日は衣がへの日なれ共、都さへ其姿見えず

ぬぎかへぬ卯月のけふのあさ衣さりとて花のうつり香もなし (246)

(247～253略)

三条西殿^{実澄}めされて参ず、二十首当座人数十七人

聞時鳥 寄世祝

稀に聞雲井の声を時鳥面影残せ行末の空 (253)

うつし見よ四方の境もわたつみの波風たゝぬ御代の鏡を (254)

同日晩は於「飛鳥井殿」鞠見物申

野つゞき見めぐりて夕にいたる

何となく虫ぞ鳴なる夕ま暮草葉涼しき野べのけしきに (255)

夏深き軒ばの梢暮初めて月影早き山もとの里 (256)

信長和泉筋出陣、八幡にて見物

みかりせし跡や鳥羽田の面影に賤が車ぞ行廻りける (257)

246 詞書に「今日は衣がへの日」とあり、246 歌は四月一日の歌であることが分かる。そして、253・254 の三条西実澄邸⁽²⁷⁾

での和歌の後に、「同日晩は於「飛鳥井殿」鞠見物申」と書かれている。先掲の『宣教卿記』から、蹴鞠のことを信長から命じられたのは飛鳥井雅教・雅敦親子であり、また夕方から鞠を行うと書かれていたから、それと合致している。

また、257 番は前節で検討した歌で、詞書に「信長和泉筋出陣、八幡にて見物」とある。信長が大阪へ出陣し、八幡

に陣を敷いたのは四月六日のことだから、その直前に詠まれたものである。つまり、時鳥の歌が詠まれた歌会と飛鳥井家での蹴鞠は、四月一日から六日までの間だから、四月三日または四日の蹴鞠のことである可能性はある。但し、『中山家記』には蹴鞠が行われた場所は「於信長宅」とあり、信長が宿泊していたのは相国寺であったため、『今川氏真詠草』の「於飛鳥井殿鞠見物申」と齟齬する。また氏真は鞠を「見物」したと書いており、鞠に加わったとは記していない。そのため、四月二日に飛鳥井邸で蹴鞠があり氏真はそれを「見物」した、その蹴鞠会の話聞いた信長が翌三日、飛鳥井雅教・雅敦父子に、自分も蹴鞠を見たいと言いつ出した、と考えるのが矛盾が無く穏当であろう。

いずれにせよ、253〜256の間に信長との蹴鞠は行われていた。しかし、氏真はそれを書き記してはいない。蹴鞠のことについても、あくまでも「飛鳥井殿」での蹴鞠で自身は「見物」していたと記している。これが四月三・四日の信長との蹴鞠を指す可能性を残すとしても、信長ではなく、あくまでも京の公家しかも蹴鞠の師範・飛鳥井家との交流として記しているのである。

では、氏真は『今川氏真詠草』に信長との会見や蹴鞠のことを、なぜ記さなかったのだろうか。それは推測するより他ないのだが、井上宗雄²⁸は次のように記している。

不本意ながら屈身せざるをえなかった我身に対する、せめてもの抵抗を、書かないことで表明したのだろうか。万感こもごも至って、その感慨を和歌ではまとめられなかったのだろうか。それとも、仇敵に蹴鞠を見せるといった事柄や感情などは、和歌に詠む境地と次元の違ったものとして、敢て記さなかったのだろうか。或いはそのような理屈をつけて（厭なことは避けて）書かなかつたのだろうか。所詮は分らないのだが、恐らくは終りに述べたような気の弱さが働いていたのではあるまいか。これが武家貴族氏真を貫いていたもののようなのである。

「所詮は分らない」のではあるが、井上の指摘に私見を加えておく。それは、『今川氏真詠草』が自分以外の人にも見せることを前提として書かれたものだったという側面である。先に、氏真がこの詠草を残す理由を、「つゞかずとも歌にして、田舎のなぐさみにもと書付」（26〜30詞書）と記していたことを述べた。京をめぐる記念として「田舎のなぐさみ」とする、というのは、帰国後に自身が読み返すためであり、加えて、自身が京で詠んだ和歌を周りの人（特に和歌を嗜む人々）にも披露することを前提にしていると考えてよい。

特に氏真は、たとえ駿河を失ったとはいえ今川家の当主だった。当主の和歌は、代々子孫に伝えられ、読み継がれてゆくことを前提とする。一人でひそかに書き綴り、誰にも見せないという性質のものではない。誰か——特に子孫が読むことを前提にする時、父の仇敵の前での蹴鞠の披露は、記すのがためらわれるものだったと想像される。しかし信長への反発心は、やはり書きとどめずにはいられないものだった。詠草を貫く和歌および王朝文化への敬慕と絡み合いつつ、歌人として伝統や歴史を愛する目線から、歴史的な地を踏み荒らす信長の無粋で暴力的な行動を批判するという、大変にひそやかな形ではあるが、信長への反発を表現したのが「賤が車ぞ行き廻りける」の歌だったと考えられるのである。

結びに

『今川氏真詠草』は、天正三年に初めて京都を訪れた氏真が、様々な寺社仏閣、和歌にゆかりのある場所を訪れ、そこで目にしたもの、感じたものを、歌人として和歌に残そうとしたものである。そのため、基本的には氏真の人生やなまの声を直截伝えるような歌はほとんど無い。氏真は京で文学や歴史にゆかりの場所を精力的に訪ねては、古の歌人たちの視線に自身を重ね、自らも和歌を詠み続けた。戦国時代の時世は、詞書や左注には記録されるが、和歌に詠

むのはあくまでも風雅を尊ぶ姿勢と、和歌の伝統に連なる歌人としての視線である。たとえ歌日記・実詠であつても、自身の人生を和歌にほとんど反映させないのが、『今川氏真詠草』の和歌の在り方であつた。

氏真のように、文学や芸能に造詣が深く熱心でありながら、政治的にははかばかしい功績を残せなかつた武将は評価が低く、文学趣味の脆弱な武士という人物像が描かれる。特に氏真は、それが本人だけの責任に帰せないとしても、領国を失い、戦国大名としての今川氏を滅亡させたという事実がある以上、政治的に厳しい評価を免れえない。氏真が詠んだ和歌、特に『今川氏真詠草』からは、王朝文化の歴史に自らを投じて、和歌の伝統的な美意識や感受性によつて、目にした風物や感動を表現しようとする氏真の姿勢が看取される。それは優雅なものである一方で、当時の彼が武士として、今川家当主として置かれた状況を考え合わせると、悲哀を感じずにもいられない。しかし、今川氏の公家的な知識や文化が、後に江戸幕府の高家への登用につながつてゆくことを考えると、決して無益なものではなかつた。

氏真の和歌は、中世和歌に求められる伝統的な美意識や作り方をよく理解した歌人のものである。当時の武将は教養として和歌を詠み、また政治的な面からも和歌は有益なものだった。和歌を詠むことで文化的にも領国を統治し、リーダーシップを発揮するという目的があつた。しかし氏真の和歌は、単なる儀礼的なものや社交の手段であつたり、必要に迫られてといった性質のものに留まらない。領国を失い、そうした大義名分を失つた後も、和歌とそれに基づく伝統的美意識を精神的な支柱とした氏真の姿にこそ、単なる趣味の域を超えて和歌を愛好した氏真の個性が表れている。和歌の伝統に対する深い敬愛が根底にあり、氏真が育んできた王朝風・公家風の美意識や感受性を表現する器が和歌であつたと考えられるのである。

氏真和歌の歌番号は新編私家集大成に、他の和歌本文・歌番号は新編国歌大観番号に依る。他の引用の使用本文は、以下の通り。なお、句読点・濁点・返り点はわたくしに付した。『氏真詠草（今川氏真詠草）』：国立公文書館デジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F100000000000046013&ID=&TYPE=&NO=>)『草庵中』：早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」(https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he04/he04_08163/he04_08163.pdf)『甲陽軍鑑』：戦国史料叢書（人物往来社、一九六五年）、『信長公記』：『改訂 信長公記』（新人物往来社、一九六五年）、『宣教卿記』：遠藤珠紀・宮崎肇・金子拓『宣教卿記』天正三年正月～五月記』、『早稲田大学図書館紀要』66、二〇一九年三月、『兼見卿記』『中山家記』：大日本史料（東京大学史料編纂所）、『紹巴富士見道記』：中世日記紀行文学全評釈集成（勉誠出版）

注

- (1) 大石泰史『今川氏滅亡』（KADOKAWA、二〇一八年）第五章第一節「氏真の実像を探る」に詳しい。
- (2) 酒入陽子「懸川開城後の今川氏真について」『戦国史研究』39、二〇〇〇年二月）、柳沢利沙「一六世紀における今川氏の動向について」『高家今川氏の知行所支配～江戸周辺を事例として～』（名著出版、二〇〇二年）所収、注（1）大石著書、長谷川幸一「天正元年以降における今川氏真の政治的地位」『論集戦国大名今川氏』（岩田書店、二〇二〇年）所収）等
- (3) 冷泉為和が今川氏の文芸に果たした役割については、米原正義『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社、一九七六年）第六章第三節三「義元および被官人の文芸」、瀬本久雄「冷泉為和と今川氏輝・義元——『今川為和集』を中心として——」（『駿河の今川氏』6、一九八二年五月）、諏訪勝則「茶の湯と和歌」（『今川義元のすべて』〈新人物往来社、一九九四年〉所収、小川剛生①「冷泉為和と戦国大名（上）（下）」『しくれてい』102、二〇〇七年一〇月、同103、二〇〇八年一月）、小川剛生②『武士はなぜ歌を詠むか——鎌倉將軍から戦国大名まで』（角川学芸出版、二〇〇八年）第四章「流浪の歌道師範——冷泉為和の見た戦国大

- 名」、上野武「戦国を流浪した為和」(『しくれてい』¹⁰³、二〇〇八年一月)、大塚勲『戦国大名今川氏四代』(羽衣出版、二〇一〇年) 付録「冷泉為和と今川歌壇」等に詳しい。
- (4) 冷泉家時雨亭叢書51『冷泉家古文書』(朝日新聞社、一九九三年) 一九五号文書。井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』(笠間書院、二〇〇七年) 第1部付章3「今川氏真研究補遺」、注(3) 小川②著書第四章第二節「歌道門弟の育成」参照。
- (5) 注(3) 米原著書
- (6) 注(3) 米原著書第六章第五節「今川文芸の総括」、『静岡県史通史編2 中世』(静岡県、一九九七年) 第三編第五章第一節「京下りの公家たちと今川文化」にまとめられている。
- (7) なお弘治二年(一五五六)に山科言繼が駿河を訪れた際、氏真は言繼から、竹内(曼殊院)門跡であった覚恕法親王筆の『百人一首』と『自讃歌』を贈られている。注(3) 米原著書参照。
- (8) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』(明治書院、初版一九七二年・改定新版一九八七年)、『今川氏と観泉寺』(吉川弘文館、一九七四年) 第二部第三章「今川氏とその学芸」
- (9) 注(3) 米原著書第六章第四節「氏真およびその他の文芸」
- (10) 「女戦国大名寿桂尼と今川氏」 凶録(島田市博物館、二〇一七年) に写真が収められている。
- (11) 注(3) 小川②著書第四章第四節「戦国大名の和歌の実力」
- (12) 小川剛生③「『今川氏と和歌』 文学活動に長い伝統と実績を持つ家柄」(『今川氏研究の最前線——ここまでわかった「東海の大 大名」の実像』(洋泉社、二〇一七年) 所収)
- (13) 『今川氏と観泉寺』⁶⁵²頁
- (14) 『戦国遺文 今川氏編第四卷』(東京堂出版、二〇一四年) 所収二五七二「今川氏真書状写」。長谷川幸一「今川氏真の「宗閻」署名初見史料」(『戦国史研究』60、二〇一〇年八月) 参照。但し、第三節に挙げた『中山家記』天正三年四月三日条に「今川入道」とあるので、四月時点で出家していたことも判明する。

- (15) 小和田哲男『駿河今川十代 戦国大名への発展の軌跡』(戎光祥出版、二〇一五年) 第十章3 「流浪の日々」によると、後年、氏真は天正十八年(一五九〇)頃から上洛して京に住んだ際には「京都四条二世捨人ノ如クニ居ラレケル」(『志士清談』)と伝えられる。
- (16) 文学や歴史を偲ぶ追体験の旅については、拙著『コレクション日本歌人選027 藤原良経』(笠間書院、二〇一二年) 43〜44頁を参照されたい。
- (17) 『今川氏と観泉寺』687・688頁、注(3) 小川②著書「終章」
- (18) 『今川氏と観泉寺』655頁
- (19) 注(3) 米原著書第六章第四節「氏真およびその他の文芸」
- (20) 注(15) 小和田著書257頁
- (21) 『今川氏と観泉寺』654頁
- (22) なお、この千鳥の香炉と宗祇香炉については、『紹巴富士見道記』永禄十年六月二十日の記事に「御館様にて、宗祇香炉に、宗長松木盆、翌日御会席半ばに御手づから出ださせ給ひ、千鳥といふ香炉、名物拝見忘れがたくして」とあり、紹巴が氏真から拝見したことを記している。
- (23) 注(15) 小和田著書
- (24) 谷口克広「太田牛一著『信長記』の日付けについての考察——日付けに疑問のある項目の指摘——」(『信長記』と信長・秀吉の時代)〈勉誠出版、二〇一二年〉所収)
- (25) 注(24) 谷口論文は、『信長記』の記載する三月二十日という日付に疑義を挟みながらも、「鞠会は三月二十日にも行われたのであろうか。(中略) 小規模の鞠会はしばしばあったのかもしれない。したがって、(中略) 可能性もまったくないとはいえないだろう」と述べている。
- (26) 嵯峨良蒼樹『評伝今川氏真——みな月のみしかき影をうらむなよ』(SAGARASUN出版、二〇一八年) は、「深山木も浮世の花

にふれてより今更人にしられぬる哉」(232 「かたはらに人あつまるをみれば花一本あり」を三月十六日の詠と比定し、「氏真も深山の遅桜と同じように、蹴鞠の足前(?)を信長始め見物の衆にもはやされて面目を施しはしたはずである。しかし今さらこんな形で「浮世の花にふれ」、俗世に関わることに当惑もした、ということだろう」と氏真の心情を読み取ろうとしているが、叙景歌に過剰に心情を読み取ろうとすると恣意的な解釈になる恐れがあるため、この解釈は採らない。

(27) なお三条西実澄(実枝)は、天文二十一年(一五五二)年九月頃から永禄元年(一五五八)八月まで、さらに永禄二年正月から駿河に下り久しく在国したので、氏真とは駿河で交流があった。実澄の駿河での文芸活動については、注(3)米原著書に詳しい。

(28) 『今川氏と観泉寺』655頁

(29) 大寫聖子「高家に登用された今川直房」『戦国史研究』35、一九九八年二月

【付記】本稿は今川義元公生誕五百年祭記念講座(二〇一九年五月六日於駿府城公園内紅葉山庭園茶室)における特別講座「今川氏の和歌——戦国大名と文芸——」に基づき成稿した。講座の折に貴重なご意見を賜りました小和田哲男先生に心より御礼申し上げます。

(本学教授)